

大学史料についての雑感

青山幹哉

『南山大学七十五年史』執筆では、私は人文学部（各学科ではなく学部全体）を担当した。その過程において調査した各史料について、感じたことをいくつか述べることにした。今回の執筆に際して閲覧・参照できた史料は、以下の通りである。

（一）学部内

教授会資料、学部自己点検評価報告書、カリキュラム改正ワーキンググループ資料、将来構想ワーキンググループ資料、個別の聞き取りによる覚書（今回、新規作成）

（二）学部外（大学内）

シラバス、履修要項、南山大学概要、入試広報関係資料

（三）大学外

退職教員のインタビュー覚書（今回、新規作成）

学部史を考察する上でもっとも有効かつ重要な資料は、学部長用の教授会資料であった。年度毎に綴じられたそのファイルは、教授会構成員に配布される議事次第・審議資料等を基として、議事関連資料が挟み込まれた上、さらには教授会後に追加で貼付された書類などによって、分厚く膨らんでいた。そこには、歴代学部長の手によるメモ書きも含まれており、なかなか興味ぶかい記述を見ることができた。まさに一級史料といえるだろう。ただ、二〇〇〇年代（〇〇年代）の末頃から、やや精彩を欠く感があり、そこからおそらく教授会の形式化という時代状況の変化を読み取ることもできるだろう。

現在のところ、学部創設以来の年度別学部長用教授会資料ファイルは嚴重に保管され、機微にわたる案件や人事・身上異動等の個人情報も記載されているためか、関係者以外の閲覧は想定されていない。古い年次のファイルはすでに非現用文書となったと思われるので、早々に南山アーカイブズに移管して保存をはかるべきであろう。

次に、カリキュラム改正ワーキンググループ資料と将来構想ワーキンググループ資料（以下、WG資料と記す）について述べる。人文学部は四学科から構成されるため、ワーキンググループのメンバーも各学科から一名選出された。そのため、選出メンバーは、検討会を開催してはその意見を所属学科に持ち帰り、学科で意見聴取しては検討会で検討を重ねる、といった作業を繰り返しておこなった。その記録は公式には保存されておらず、教授会に報告された中間報告書・最終報告書、あるいはカリキュラム改正案のみが教授会審議資料として保存されていた。したがって、今回、調査したWG資料は、当時のメンバーが手元で保存していたものが主となった。そのため当然ながら、WG資料は不完全なものでしか、伝存していない。残念ながら、事務方が関与せず、教員のみによって構成される短期の委員会等では、記録・保存という觀念が欠落しやすいと言わざるを得ない。検討会の議案書等は作成されているので、せめて議案書に座長がメモ書きした記録等については、作業終了後に公的な場で保存する体

制をつくるべきであろう。

三つ目は、聞き取り調査によって作成された資料の問題である。具体的には、退職教員へのインタビューと、現職教員へ質問した際の回答、である。今回は、いずれも私個人との信頼関係を軸としたため、公私の区別が付きにくくなったものもあった。また、公式の調査の場合でも、非公開を条件とする等、いくつかの制約があった。したがって、執筆に際しては、一部の例外を除いて、調査者（私自身）が聴取し理解した範囲のことを、私の責任において記述するしかなかった。記述の信憑性という観点からすれば、いささか問題が残る方法ではあるが、現実にはやむを得ない対応であったと思う。

四つ目は、デジタル資料の問題である。人文学部では、二〇一九年度から教授会資料すべてをデジタル化した。ペーパーレスとなり、当然、手書きによる書き込みは難しくなった。資料の形態が大きく変貌したのである。デジタル化の進行は、この数年で急速に進み、ほとんどの書類・記録がその対象となった。その一部は、大学のWebサイトで公開され、容易に閲覧できる。ただし、それも将来いつ削除されるか不明である以上、サイトでの公開だけでは資料保存にならない。デジタル化された資料の管理・保存については、それぞれの部局に委ねるのではなく、アーカイブズの視点から作成された保存マニュアルを必要とする段階になったと思う。将来、歴史資料として活用できる環境を整備しておかないと、気がついたら消去されていた、という事態が起こりうるのである。

また、今日においては、Eメールでのやり取りが重要な史料になりつつある。WG資料を調査した際には、結局紙にプリントされたEメールだけが史料として残った、という現実を目の当たりにした。公用のEメールについては、そのデータを個人だけではなく、組織体として保存しておくことが望ましい、ただ、それでは忌憚のない意見を書かなくなる危惧も生じるので、そう簡単な問題ではないだろう。

以上、ざっと史料論的見地から、所感を述べてみた。今回の資料調査では、学生の側からの資料（各種アンケート、「アゴラ」への投稿など）や、マスメディアに掲載された関係記事などについては、まったく調査できなかった。個人による作業では無理があることは当初から承知していたが、いささか残念でもある。

『南山大学百年史』に向けての史料調査は、より体系的・組織的に進めるべく、早期に史料調査専門の委員会を設置し、専門の調査員を雇用されることを切に望む（無理かな？ 永井英治委員長、頑張って！）。

終